

書評

村井俊哉 著

精神医学の实在と虚構

加藤忠史

その内容のみならず、構成の斬新さにも驚かされる、大変興味深い書物である。

村井俊哉氏は、ここで紹介するまでもなく、京都大学精神医学教室の教授として、精神医学の中でも中心的存在として活躍され、論文だけでなく、多くの著書や訳書も出版されている。中でも、最近のナシア・ガミー氏の『現代精神医学原論』、『現代精神医学のゆくえ—バイオサイコソーシャル折衷主義からの脱却』の翻訳は、大きなインパクトを与えた。

本書は、村井氏の多数の論文の中から、「自分の専門職のミッションとしての『90%』以外の『10%』の中で考えてきたこと」についての論文を集めたものであるという。この種の書物は通常、過去の論文をまとめて1冊にするのが普通である。しかし本書で村井氏は、過去の論文について、自らの論考の変遷をたどりつつ紹介するという、これまでにない形式をとっている。

その形式のみならず、論理構成もまた、斬新である。第1章は、カプグラ症候群についての考察から始まる。身近な人物が瓜二つのにせものと入れ替わってしまっていると確信するカプグラ症候群は、その特異な性質により、精神病理学と神経心理学の境界領域にある症状として、多くの精神科医の関心を引いてきた。

ところが、第2章では急に、DSMにおける疾患名についての議論となる。何も知らずに目次だけ見ていると、一見、過去の論文を無造作に並べただけのように見えるが、実は、一つ一つが別の論文でありながら、その流れが全体として一つの論理を構成しているのである。

カプグラ症候群では、例えば母親に対して、「姿形も声もそっくりだが、母親ではない」と確信する。ここでは、姿形や声など、視覚・聴覚で確認するこ

とのできる属性では現すことのできない「本質」が存在することが前提となっているのである。一方、精神医学における疾患概念においても、症状や経過の特徴のみでは記述できない本質があると信じられてきた、と村井氏は指摘する。そして、DSMが日本に受け入れられる際の軋轢は、「本質」を扱おうとする伝統的精神医学と、「姿形」を扱おうとするDSMの間の摩擦であった、と述べている。

この考察は、筆者にとって、納得のいくものであった。筆者は以前より、ミシュランのような覆面調査員が多くの精神科を受診して診断一致率を調べるという研究を行ったら興味深いのではないかと考えていた。しかし、よく考えてみると、完璧なうつ病の演技を覚えた役者を、芝居の通りに「うつ病」と診断するよりも、そのうつ病は芝居だ！と見破る方が正しいに決まっている。とはいえ、もし症状評価尺度のトレーニング用に役者によるうつ病の映像を作成したとしたら、芝居通りに評価することを正解とすることになるだろう。本書は、こうした問題に潜む精神医学の根本問題について、明確な視点を提供してくれる。

この最初の2章の論理の流れだけでも目から鱗が落ちる思いであったが、村井氏の論考はそこにとどまらず、精神医学と脳科学の関係、そして精神医学の目的へとさらに進んでいく。読者にはぜひ、実際に読んで、この本の魅力を体験していただきたいと思う。

精神医学に携わる者として決して通り過ぎることのできない、刺激的な書物である。

(理化学研究所脳科学総合研究センター)

●四六判 232頁 2014 定価：本体2,400円＋税 日本評論社刊